

ただしいずれも長安城宮城の太極宮を模倣している。渤海上京城は都の時期が長く、宮城周囲に付属区、皇城、規模を拡大した郭城、王室の居する宮城、皇城に官衙を配置し、郭城に民を住ませた。郭城内は、数条の東西南北に直交する街路と街路には石築城牆で画された里坊で画した。そのうち宮城、皇城と中軸の大街の両側のいくつかの里坊内にはまた仏教寺院が建てられた。そのように隋唐都城の長安城の計画プランと設置と、基本的に同じであるが、ただ渤海政権の等級は低く、その都城の規模は、隋唐中央政権の都城とくらべて小さい。

上京城宮城の城門と宮殿は、宮城正門の位置、門外の企画、計画プランは長安城の太極宮正門の承天門、第1宮殿の位置、建築は大明宮含元殿のようである。したがって上京宮城の正門と第1宮殿は「外朝」に相当する。第2殿の規模は広大で、大明宮宣政殿の同じで、渤海王が「常朝之所」で、「中朝」にあたる。第3・4宮殿は大明宮紫宸殿のようで、「内朝」に属する。両殿をあわせると、紫宸殿の前・後殿に相当する。

等級の厳格な封建社会のなかで、都城の企画計画プランは重要な文化水準をしめし、なおいっそう重要な政治制度をあらわしている。渤海都城の計画プランは極力隋唐長安城を模したので、渤海と中原の「疆里虽重海、車書本一家」の密接な関係にあることをしめしている。

【コメント】

小方 登

京都大学の小方です。私は最近、米国の衛星写真を利用して、渤海の都のプランを検討し、研究成果を明らかにしました。衛星写真による研究は、いわば大局的な観点からのものでありますので、魏先生の考古調査に基づく詳細な研究とは、相互に補完する関係にあるといえます。

魏先生のご発表・ご成果を一言で要約するならば、古代東アジアの都城プランに、発展モデルを導入した、ということになるでしょう。《都市は発展する》という観点は、近代の都市に関して、いわば常識であります。1990年代に入り、中国の北京や上海は、めざましいスピードで発展し、周辺に拡張しています。日本でも1980年代までは、都市が拡張するのは当然と考えられていました。しかし、その後拡張のスピードが落ちたため、予想を誤った不動産開発業者は、困るようになりました。

《都市は発展する》という考え方は、近代都市を扱う都市社会学や都市地理学では、理論に深く組み込まれており、たとえばバージェスの同心円地帯モデルでは、ある時点での土地利用などが織りなす空間パターンは、都市の発展過程を反映していると考えられます。

しかし、中国の唐の長安をモデルとする東アジアの都城を考える場合、都市の発展・拡張は、必ずしも自明ではなかったように思います。つまり、日本の奈良の都、平城京はできたときにすでに大内裏と京城をそなえた完成したプランを持っていたのであり、別の場所に都が移るまで、プランに大きな変化はなかったと考えられているのではないのでしょうか。

ここで、観点を変えて、東アジア以外の古代都市に目を向けてみましょう。この衛星写真は、トルクメニスタンのメルヴの古代都城です。丸く見える内城がエルクカラ、その南側の大きな

長方形の部分がギャウルカラです。ここでは、内城が先史時代からある集落であり、アレクサンダー大王以後ギリシア人が入植したとき、外城であるギャウルカラを構築したと考えられています。一般に地中海地域・西アジア・中央アジアでは、都市の構造はアクロポリス（シタデル＝城砦；上町）と下町からなり、アクロポリスは地形的に高く、そこは古くからの集落であり、政治・宗教における中心を占めていたということがいえるでしょう。

魏先生の見解は、上京龍泉府の宮城・皇城・郭城の三重のパターンを、発展の過程としてとらえ、ひいては東アジアの都城についての発展モデルを提案した点で、非常に重要であると思います。ただ、私が衛星写真上で西古城（中京顕徳府）と八連城（東京龍原府）のプランを検討した結果、魏先生が大城として述べられているものについて、知識が得られましたので、ここに紹介します。これが上京龍泉府の衛星写真、そして復原プランです。内側から宮城・皇城・郭城の三重の囲郭により構成され、規則的な格子状の街路が施行されています。

こちらが中京顕徳府に比定される西古城の衛星写真です。積雪のパターンから西古城周辺に東西・南北の主要街路がかつて存在したことがわかります。また、周辺の水路のパターンからも、西古城を内城とする外城相当部分がかつて存在したことをうかがわせます。これらの手がかりをもとに、このような復原プランを考えました。

これは東京龍原府に比定される八連城の衛星写真です。八連城の南側には、やはり南北・東西の主要街路の痕跡がみられ、八連城を内城とする方格プランをもった外城相当部分が存在したことがわかります。ここで明らかになった主要道路は幅員が100m以上にもなる雄大なものでした。

ここで、西古城と上京龍泉府の宮城を比較すると、魏先生のご指摘の通り、まったく同一の規格であることがわかります。それゆえ、上京龍泉府の三重構造は、宮城が立地した後、段階的に三重構造に発展したという、魏先生の見解に賛成します。ただし、西古城や八連城にも、これらを内城とする外城や条坊プランが当初から存在し、少なくとも部分的には、施工されたと思われることから、私は当初の二重構造から三重構造に発展したのではないかと考えます。

（京都大学大学院 人間・環境学研究科）